



# PostgreSQLによる データベースサーバ構築技法

---

日本PostgreSQLユーザー会  
理事長  
石井達夫



# PostgreSQLとは

---

- カリフォルニア大学バークレー校(UCB)で開発
- 現在は世界中のボランティアの手によって維持
- 本格的なオープンソースデータベース
- Unix/Linux/Windowsなどで稼動
- 無償利用、自由なライセンス
- 商用サポートあり



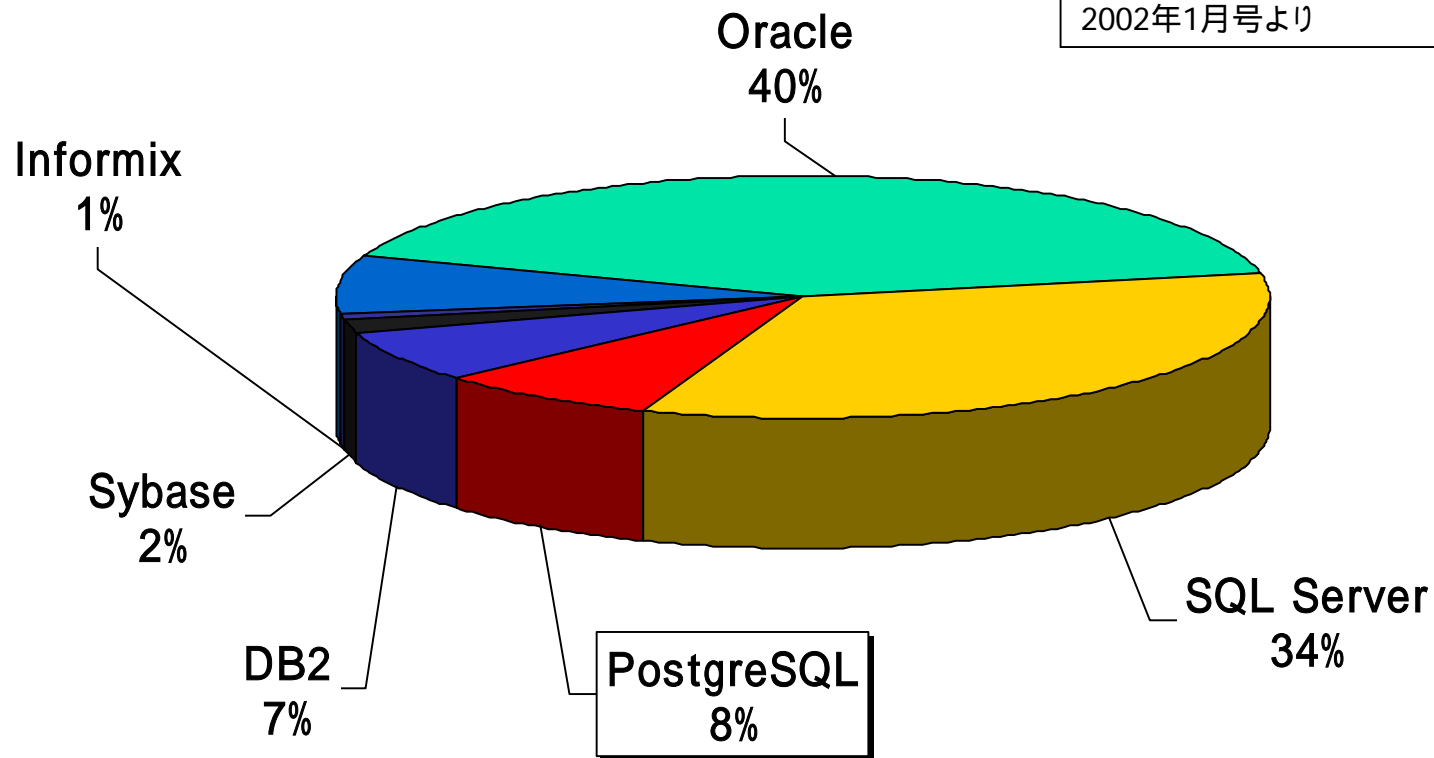
# PostgreSQLの特徴

---

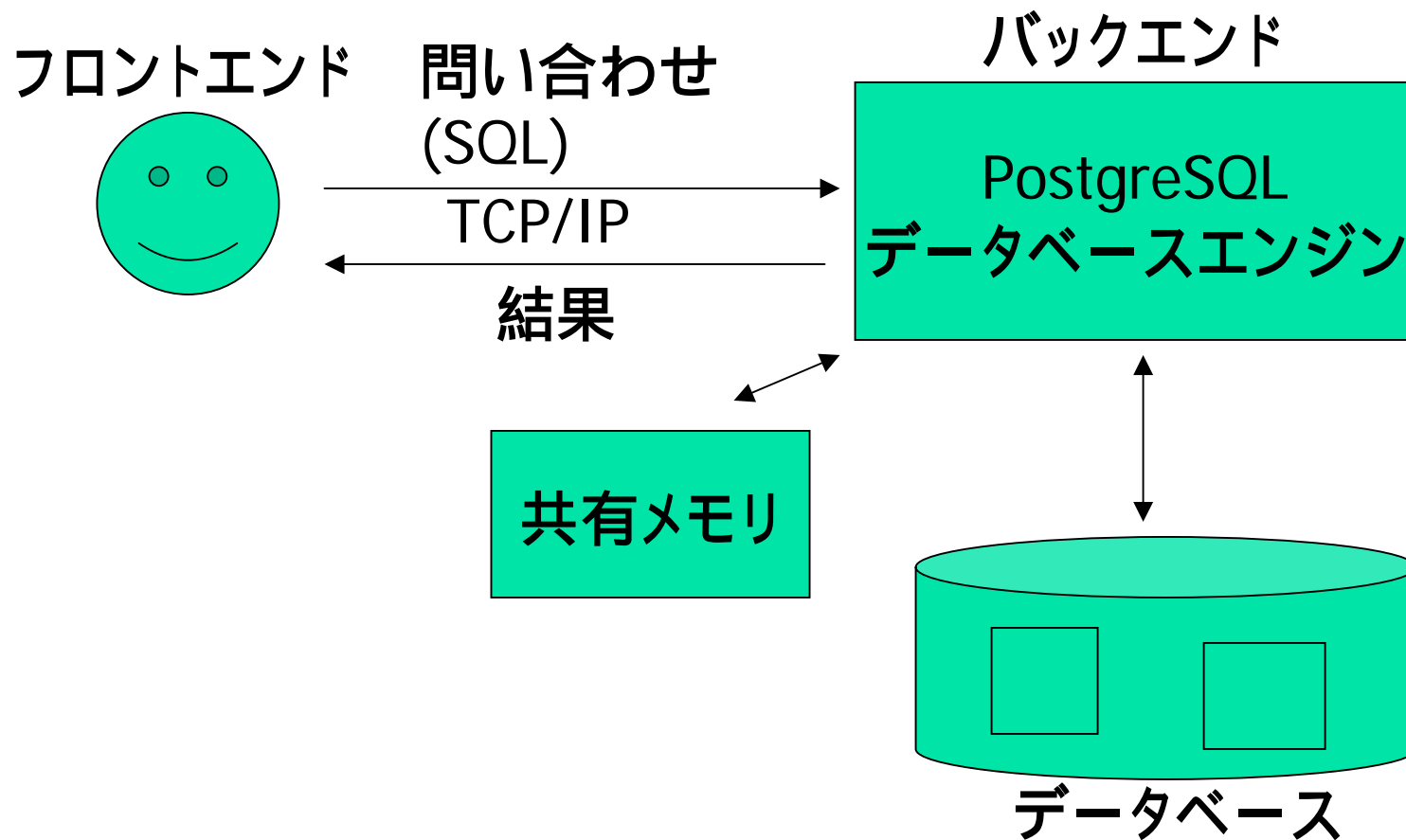
- 関係データベース + オブジェクト指向拡張
- 強力なトランザクション管理機能
- 容易な管理
- 大規模データ・大規模ユーザの管理可能
- 多彩なAPIをサポート
  - C, C++, Java, Perl, Tcl/Tk, PHP, Ruby...

# PostgreSQLの利用実績

データは日経オープンシステム  
2002年1月号より



# PostgreSQLの構造





# PostgreSQLの機能(1)

---

- SQL92/99のサポート
- 非標準SQL
  - トリガー
  - ストアドプロシジャ
  - シーケンス
  - 幾何データ型
  - ユーザ定義データ型
  - テーブルの継承

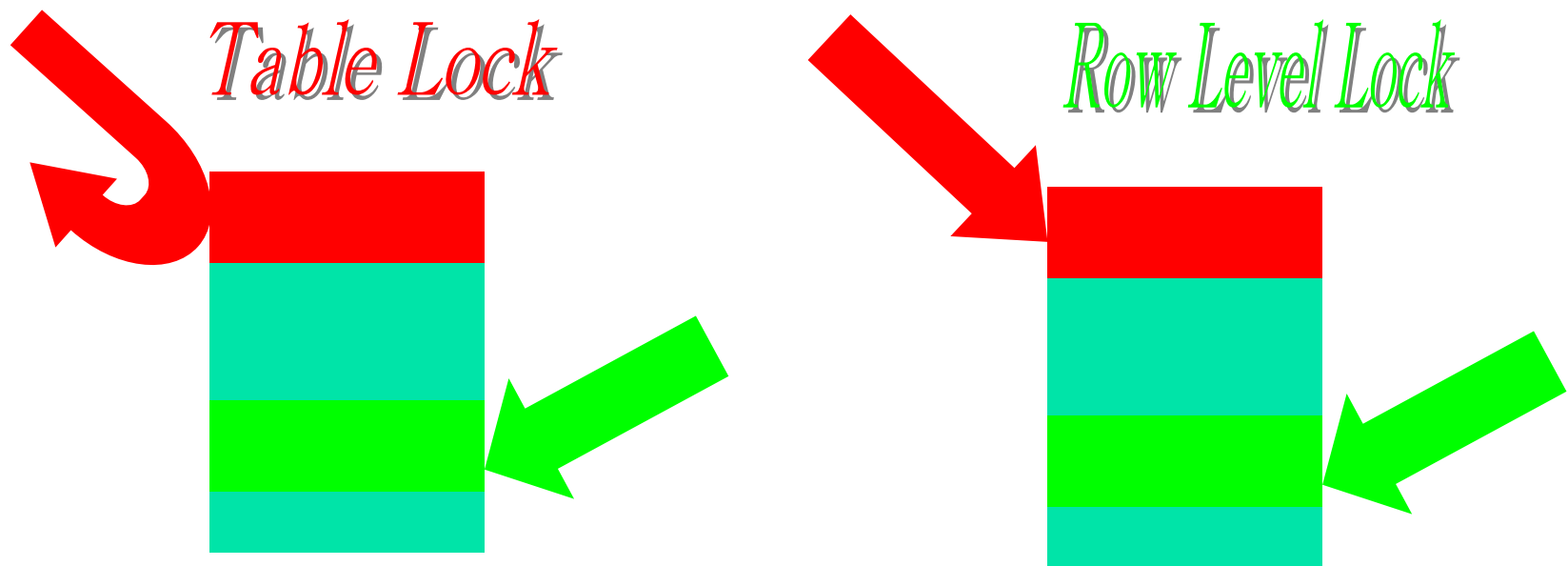


# PostgreSQLの機能(2)

---

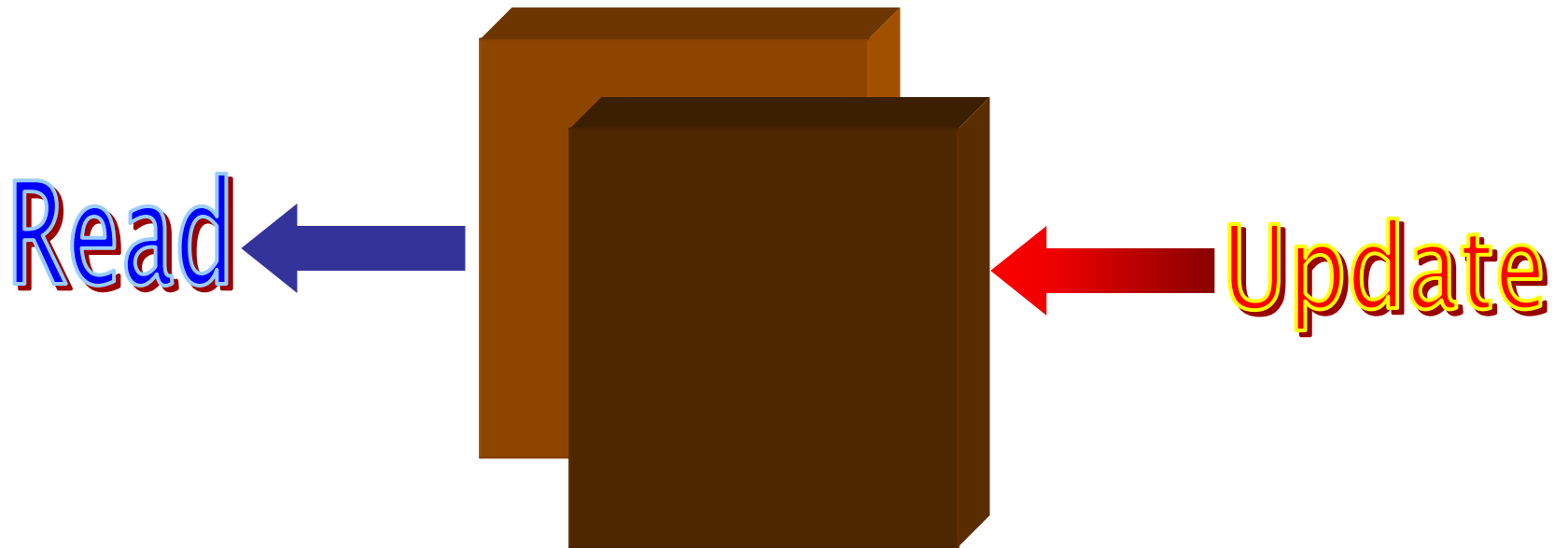
- 行ロック
  - テーブルロック
  - ページロック
- MVCC(Multiversion Concurrency Control)
  - 多版式同時実行制御
  - Oracleの「読み取り一貫性」と同じ機能

# 行ロック (Row Level Lock)





# MVCC(Multi Version Concurrency Control)





# PostgreSQLの機能(3)

---

- 国際化、日本語対応
  - 日本語をはじめ、ほとんどの国の言語を利用可能
  - Unicode(UTF-8)に対応
  - UnicodeとSJIS/EUC-JPの相互変換をサーバ側で対応 → Unicode対応のアプリケーションがなくてもUnicodeを利用可能



# PostgreSQLの機能(4)

---

- データベース最大容量
  - 特に制限なし。ただし、1パーティションにデータを収める必要あり
- テーブル最大行数 -- 特に制限なし
- 最大列数 -- 約2000
- 最大データサイズ(1アイテム)
  - 1GB – BLOB/CLOBでの利用も可能
- 最大同時接続数
  - 特に制限はないが、実際問題として100-1000位



## PostgreSQLの機能(5)

---

- トランザクションログによるリカバリ
- ホットバックアップ(オンラインバックアップ)可能
- コマンドラインのSQLインタプリタ
- GUIベースの管理ツールあり

The screenshot displays the PostgreSQL Visual Query Designer interface. The main window shows a query design with three tables: '顧客マスタ' (Customer Master), '販売実績' (Sales Record), and '商品マスタ' (Product Master). Lines indicate relationships between fields in these tables. The '販売実績' table is highlighted, showing its fields: 顧客ID, 商品ID, 販売数量.

The 'テーブル' (Table) window shows a table with the following data:

顧客名	会社名	商品名	売上
はなこ	はなこ株式会社	ふくろう時計	300000
はなこ	はなこ株式会社	やまねこ時計	294800

The 'Choose color' dialog is open, showing color selection options for Red, Green, and Blue channels, with a Selection field set to #000000.



# PostgreSQLの導入

---

- ソースからのコンパイル
  - 最新版を利用できる
  - バグ修正が迅速に行える
  - RPMなどの管理から外れる
  - コンパイル環境が必要
- バイナリパッケージの導入
  - インストール/アンインストールが簡単
  - パッケージ管理との整合性
  - カスタマイズ、バグ対応が困難
  - 中身がブラックボックス(駄目駄目パッケージの存在)
- 現状ではソースからのインストールにメリットあり



# ソースの入手先

---

- 一時配布先
  - <http://www.postgresql.org>
- ファイル名
  - postgresql-7.2.1.tar.gz



# 必要条件

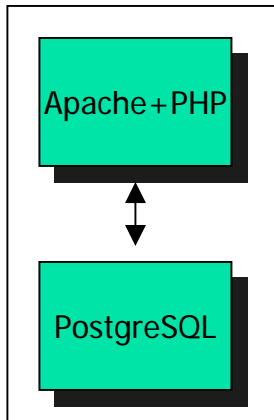
---

- ディスク容量: 120MB(うちソースが60MB)  
+ ユーザデータベースサイズ
- メモリ: 512MB以上を推奨(Xなどを動かさなければ64MB程度でも動作する)
- 最低必要なツール
  - GNU make
  - gcc



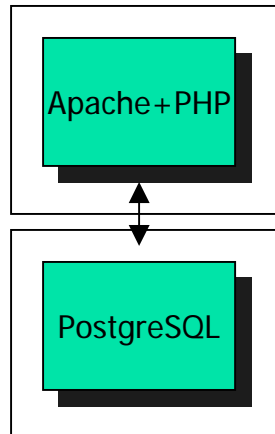
# 構成の検討

同一ホストにフロント  
エンドとバックエンド



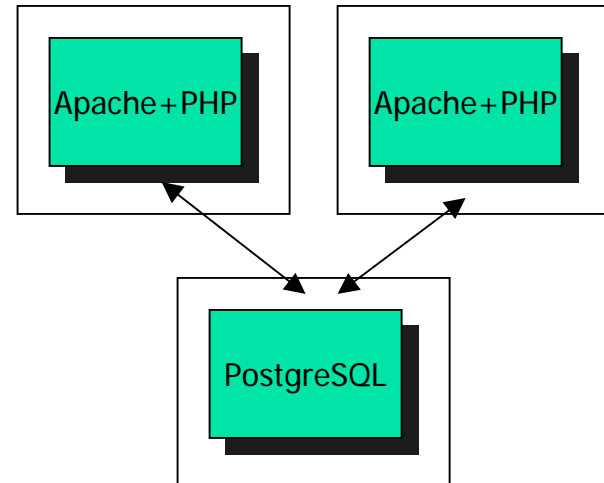
- フロントエンドとバック  
エンドの通信はUnix  
ドメインソケットまたは  
TCP/IP
- 小規模、低コスト
- イントラネット

フロントエンドと  
バックエンドが別ホスト



- フロントエンドとバック  
エンドの通信はTCP/IP
- 中規模システム
- インターネット

複数フロントエンド



- フロントエンドとバック  
エンドの通信はTCP/IP
- 大規模システム
- インターネット
- フロントエンドの高可用性、負荷分散



# インストールの流れ

---

- 専用アカウントの作成
- コンパイル
- 回帰テスト(オプション)
- インストール
- .bashrcなどの設定
- postgresql.conf/pg\_hba.confの設定
- postmasterの起動



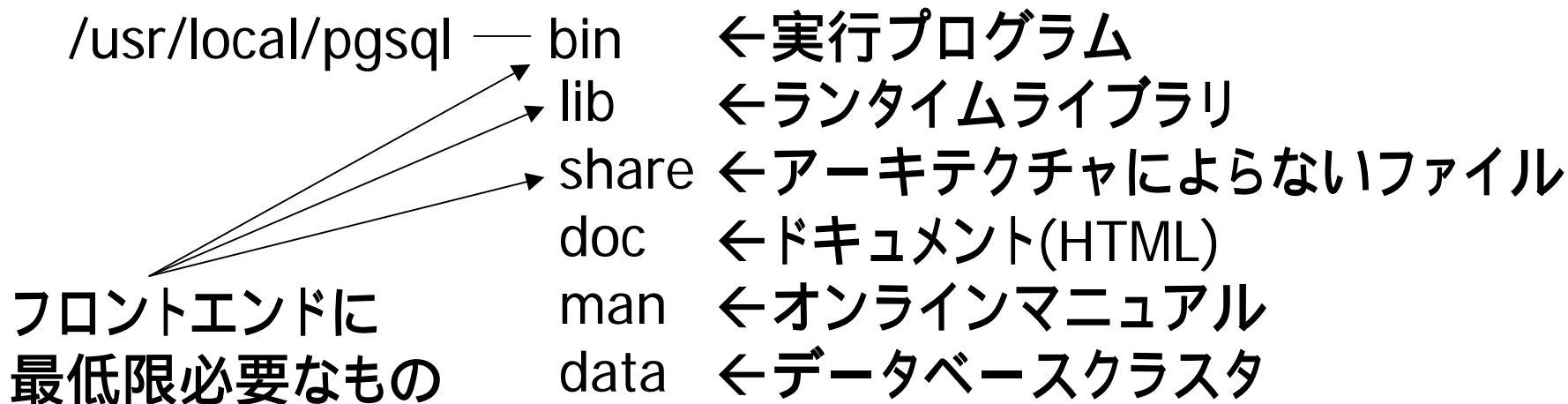
# インストールの実際例(1)

```
# useradd postgres ←postgresユーザの追加
# mkdir /usr/local/src/postgresql-7.2.1 ←コンパイルディレクトリ
# mkdir /usr/local/pgsql ←インストール先
# chown postgres /usr/local/src/postgresql-7.2.1 /usr/local/pgsql
# su postgres
$ cd /usr/local/src
$ tar xfz /tmp/postgresql-7.2.1.tar.gz
$ cd postgresql-7.2.1
$ ./configure --enable-multibyte --enable-unicode-conversion --
  enable-syslog ←マルチバイト対応、Unicode対応、syslog対応
$ make ←コンパイル
$ make check ←回帰テスト
```

# インストールの実際例(2)

\$ make install ← インストール

- /usr/local/pgsql/以下のファイル(dataを除く)はフロントエンドにもコピー可能 (ハード、OSが同一という前提)





# PostgreSQLの起動と設定

- postgresユーザの.bashrcの設定

```
PG=/usr/local/pgsql
```

```
export PGLIB=$PG/lib ← ランタイムライブラリなど
```

```
export PGDATA=$PG/data ← データベースクラスタ
```

```
export LD_LIBRARY_PATH=$PG/lib
```

```
PATH=$PG/bin:$PATH ← コマンドサーチパス
```

- データベースクラスタの初期化

```
$ initdb
```

- データベースサーバ(postmaster)の起動

```
$ postmaster -S -i
```



# データベースクラスタの 内部構造

/usr/local/pgsql/data

PG_VERSION	バージョン情報
postmaster.opts	postmasterへの引数
postmaster.pid	postmasterのプロセスID
pg_hba.conf	認証設定
pg_ident.conf	ident認証設定
global	データベース共通テーブル
pg_xlog	トランザクションログ
pg_clog	トランザクション情報
base	この下に各データベースが格納されている



# postgresql.conf

---

- 主設定ファイル
- 変数 = 値
- 設定例: syslogに実行SQL文を表示
  - `syslog = 2`
  - `debug_print_query = true`
  - `/etc/syslog.conf`

`*.debug;mail.none;authpriv.none;cron.none`

`/var/log/messages`



# ユーザとデータベースの作成

---

## ■ ユーザの作成

```
$ createuser foo
```

```
Shall the new user be allowed to create databases? (y/n) n
```

```
Shall the new user be allowed to create more new users? (y/n) n
```

```
CREATE USER
```

## ■ データベースの作成

```
$ createdb -E エンコーディング foo
```

```
CREATE DATABASE
```

### ■ 日本語の使用できるエンコーディング

- EUC\_JP, UNICODE(UTF-8)



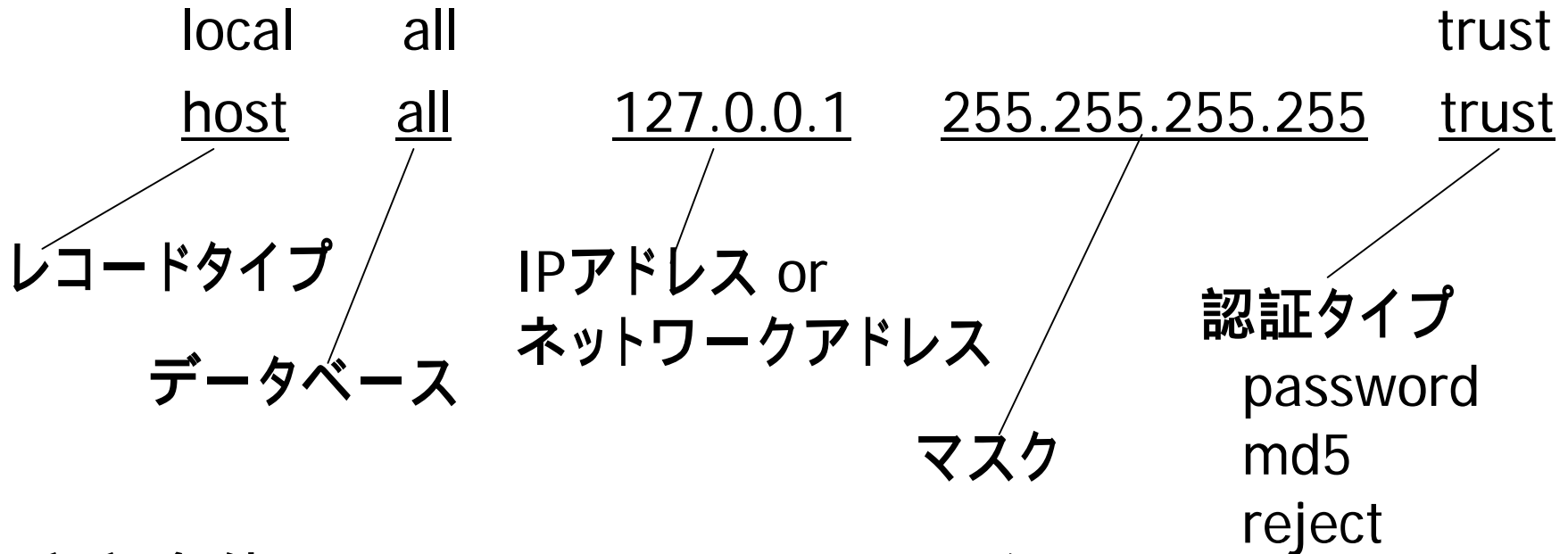


# セキュリティ

---

- パスワード認証
- ホストIPアドレスによる認証
- テーブルなどのデータベースオブジェクトレベルでの権限設定
  - GRANT/REVOKE

# pg\_hba.conf



**認証条件: IP = フロントエンドIP & マスク**

例: IP = 192.168.1.0, マスク = 255.255.255.0

なら 192.168.1.xはすべてOK



# 運用管理(1)

---

- VACUUM
  - テーブルのガーベジコレクション
  - PostgreSQLのもっとも重要な運用管理SQLコマンド
  - 通常のVACUUM
    - 空き領域の登録
    - 運用中でも実行可能
    - 少なくとも1日に一回実行
  - VACUUM FULL
    - 空き領域を物理的に圧縮
    - 運用中でも実行できるが、処理中のテーブルにロックがかかる
    - 運用に支障のないときに実行



# 運用管理(2)

---

## ■ VACUUMの設定

- postgresql.confのmax\_fsm\_pages = ページ数を設定
  - データベースクラスタ(/usr/local/pgsql/data)の容量を計算(du -sの出力を参考にする)
  - FSMページ数 > DB容量(バイト数)/8192 になるように設定

## ■ VACUUMの実行例

- `$ vacuumdb -a`



# 運用管理(3)

---

## ■ REINDEX

- インデックスの再構築
- 運用中にも実行できるが、処理中のテーブル、インデックスにロックがかかる
- 目安として、1週間～1ヶ月に1回運用に支障のないときに実行
  - `$ psql -c "REINDEX TABLE foo" bar`
- 数ヶ月に1回、スタンドアローン postgres から実行することを推奨(`man reindex`参照)
  - システムインデックスの再構築



# 運用管理(4)

---

## ■ ANALYZE

- 問い合わせオプティマイザが使用する統計情報の更新
- ANALYZEをしておかないと、正しい問い合わせプランが作成されない→SELECTが遅くなる
- データを大量に追加、更新、削除したときに実行することを推奨
- 実行例
  - `psql -c "ANALYZE" bar`



# 運用管理(5)

---

- Web用バックエンドDBの設定ポイント
  - 多数の同時コネクション
  - postgresql.confの設定例
    - max\_connections = 128
    - shared\_buffers = 1024
    - deadlock\_timeout = 128
    - max\_files\_per\_process = 40
  - OS設定例
    - /etc/sysctl.conf
      - fs.file-max = 16384
      - kernel.shmmax = 134217728



## 運用管理(6)

---

- バックアップ(ラージオブジェクトがない場合)
  - データベース単位のバックアップ  
\$ pg\_dump データベース名 > /tmp/db.out
  - データベース単位のリストア  
\$ psql -f /tmp/db.out データベース名





## 運用管理(8)

---

- データベースクラスタ全体のデータベース単位のバックアップ

- バックアップ

```
$ pg_dumpall > /tmp/db.out
```

- リストア

```
$ initdb
```

```
$ psql -f /tmp/db.out template1
```



## 運用管理(9)

---

- バックアップ(ラージオブジェクトがある場合)
  - データベース単位のバックアップ  
\$ pg\_dump -b -F cデータベース名 >  
/tmp/db.out
  - データベース単位のリストア  
\$ pg\_restore -d データベース名 /tmp/db.out



# 運用管理(10)

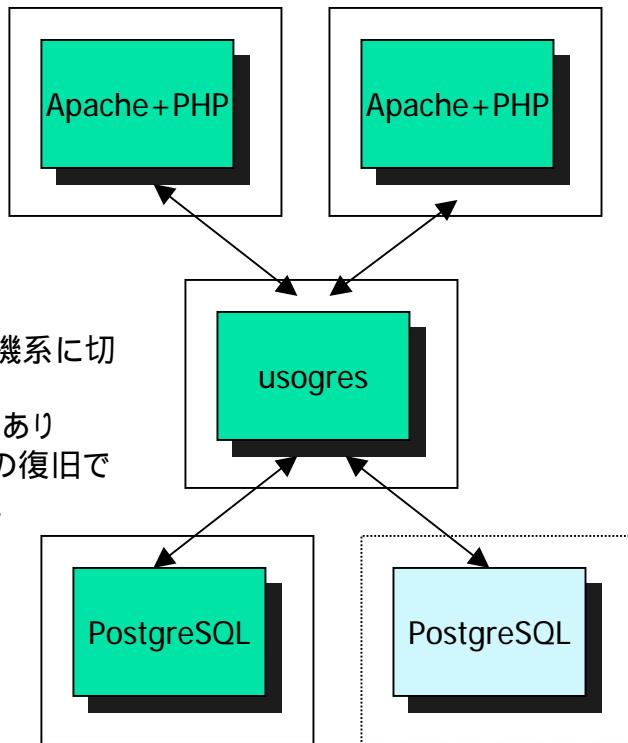
---

- レプリケーションの利用
  - 差分バックアップ、オフラインログによるリカバリができない→バックアップだけでは最新のトランザクションを復旧できない
  - PostgreSQLが停止しても運用を続けたい
  - レプリケーションの導入で解決
    - usogres
      - <http://usogres.good-day.net>
    - FC Replicator
      - <http://www.fastconnector.com>

# 運用管理(11)

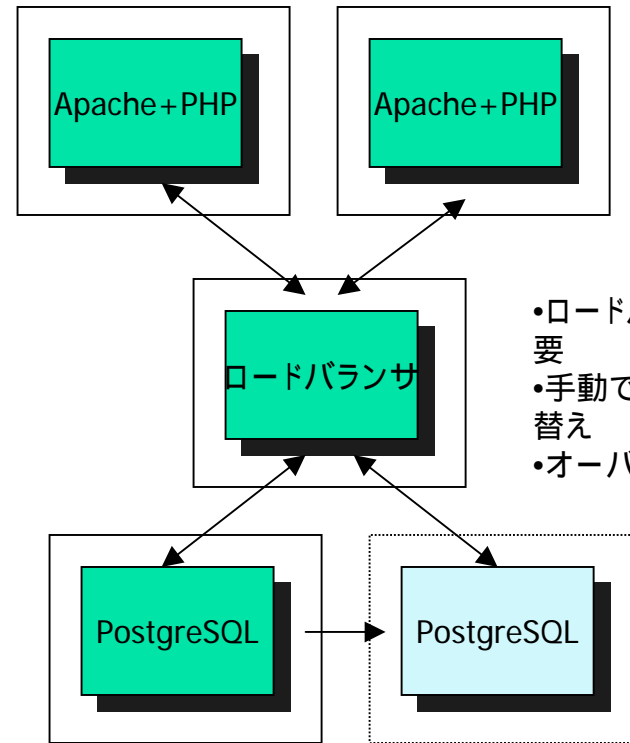
## レプリケーション

usogres



- 低コスト
- 自動的に待機系に切り替え
- オーバヘッドあり
- 待機系からの復旧でシステム停止

FC replicator

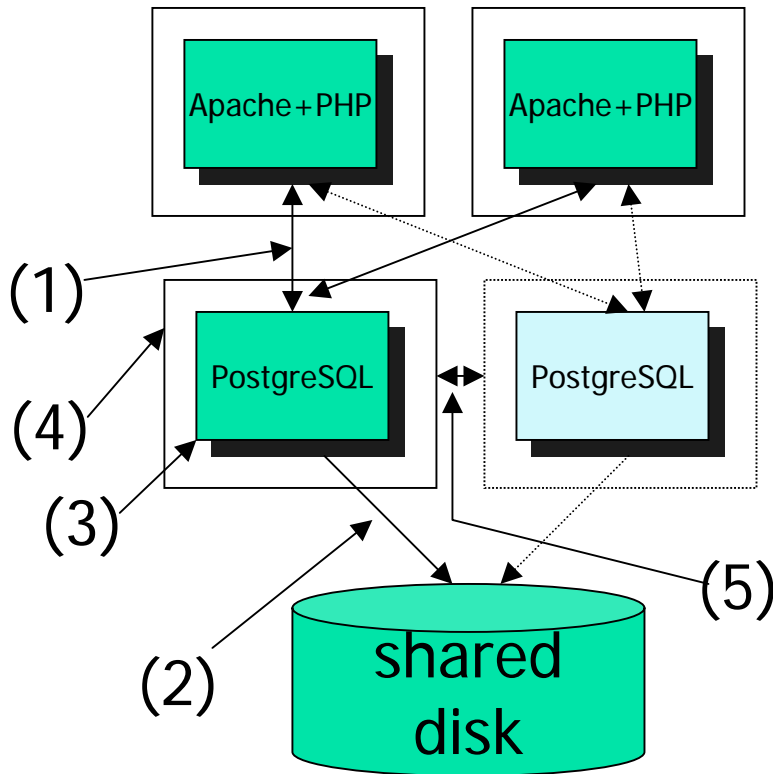


- ロードバランサが必要
- 手動で待機系に切り替え
- オーバヘッドなし

# 運用管理(12)

## 高可用性(High Availability)

複数フロントエンド



- フロントエンドとバックエンドの通信はTCP/IP
- 大規模HAシステム
- インターネット
- フロントエンドの高可用性、負荷分散
- バックエンドの高可用性
- いろいろな製品がある

LifeKeeper+PostgreSQL Ark  
によるシステムの場合に対応できる  
障害例:

- (1)ネットワーク障害
- (2)ディスクケーブル障害
- (3)postmasterダウン
- (4)OSダウン
- (5)ハートビート障害



# PostgreSQL 7.3について

---

- DOMAIN
- SCHEMA



# DOMAIN

---

- SQL標準
- データ型 + デフォルト値 + 制約 = DOMAIN
- 同じようなデータ型の宣言の繰り返しを避けることができる



# DOMAIN: 構文

---

```
CREATE DOMAIN domainname [AS] data_type  
    [ DEFAULT default_expr ]  
    [ constraint [, ... ] ]
```

where constraint is:

```
[ CONSTRAINT constraint_name ]  
{ NOT NULL | NULL }
```





# DOMAIN: 使用例

---

```
test=# CREATE DOMAIN customer_id CHAR(16) DEFAULT  
CURRENT_DATE::TEXT NOT NULL;
```

```
CREATE DOMAIN
```

```
test=# CREATE TABLE customers(custid customer_id, custname  
TEXT);
```

```
CREATE
```

```
test=# \d customers
```

```
Table "customers"
```

Column	Type	Modifiers
-----+-----+-----		
custid	customer_id	not null
custname	text	



# DOMAIN: 使用例

---

```
test=# INSERT INTO customers(custname)
      VALUES('foo');
```

```
INSERT 16607 1
```

```
test=# SELECT * FROM customers;
```

```
      custid      | custname
```

```
-----+-----
```

```
2002-05-10      | foo
```

```
(1 row)
```



# SCHEMA

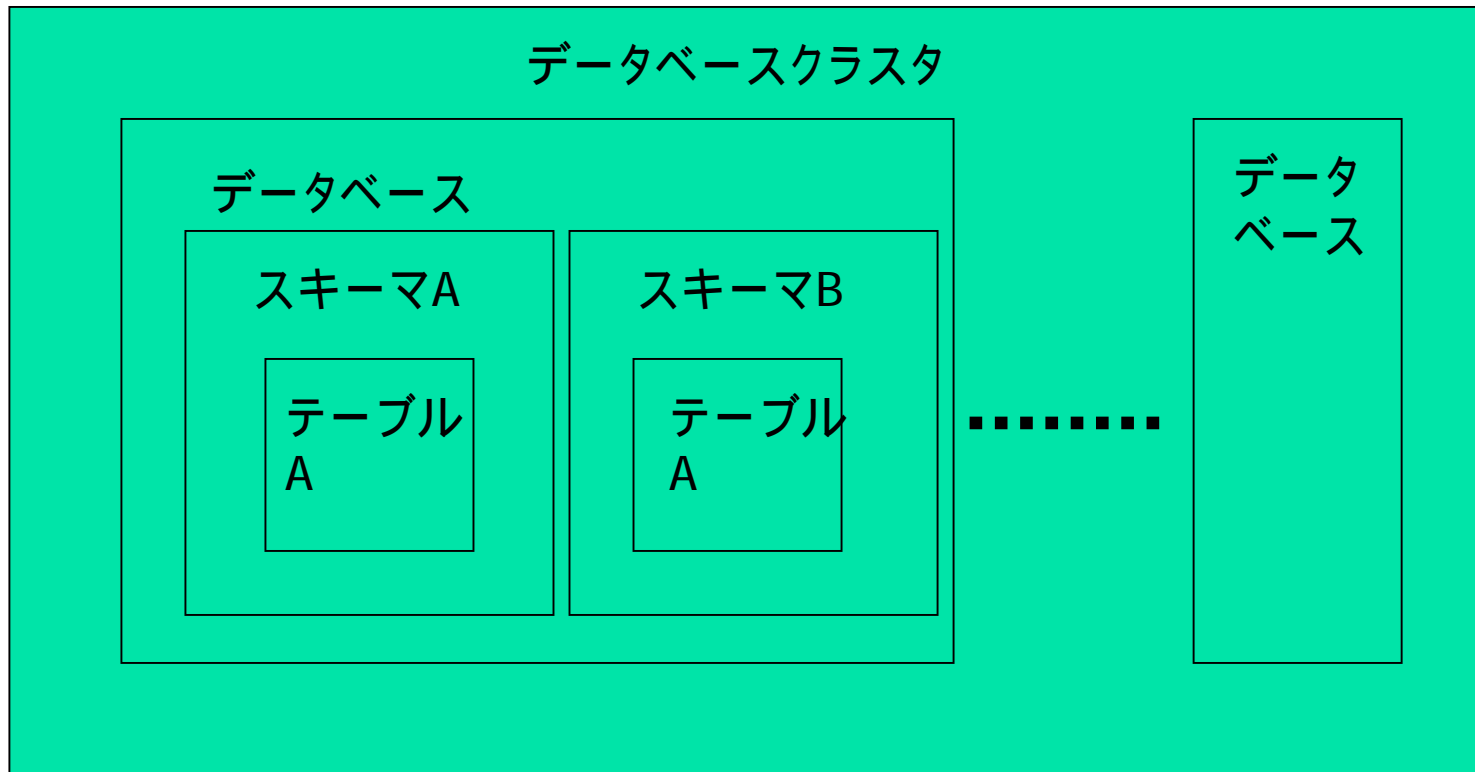
---

- SQL標準
- ユーザごとに別の名前空間を持つ
  - `SELECT * FROM foo.table1;`



# SCHEMA

---





# 構文

---

```
CREATE SCHEMA schemaname  
[ AUTHORIZATION username ]  
[ schema_element [ ... ] ]
```

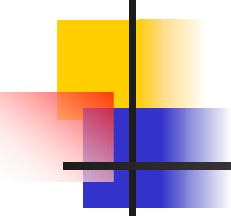
```
CREATE SCHEMA AUTHORIZATION username  
[ schema_element [ ... ] ]
```



# 使用例

---

- myschemaという名前のスキーマを作る。  
所属はコマンドを実行したユーザ
  - CREATE SCHEMA myschema;
- ユーザfooのためにfooschemaというスキーマを作る
  - CREATE SCHEMA fooschema  
AUTHORIZATION foo;



# スキーマの一覧を見る

---

```
test=# select * from pg_namespace;
```

```
  nspname  | nspowner | nspacl
```

```
-----+-----+-----
```

```
pg_catalog |         1 | {=U}
```

```
pg_toast   |         1 | {=}
```

```
public     |         1 | {=UC}
```

```
pg_temp_1  |         1 |
```

```
myschema   |         1 |
```

```
fooschema  |        100 |
```

```
(6 rows)
```



# スキーマにオブジェクトを 所属させる

---

```
test=# CREATE TABLE myschema.t1(i INTEGER);  
CREATE  
test=# CREATE SCHEMA myschema2  
test-# CREATE TABLE t1(i INTEGER)  
test-# CREATE TABLE t2(i INTEGER)  
test-# ;  
CREATE
```



# スキーマが違えば同じテーブル名が存在できる

```
test=# create schema myschema;
CREATE SCHEMA
test=# create table t1(i int);
CREATE TABLE
test=# create table myschema.t1(i int);
CREATE TABLE
test=# \dt
      List of relations
 Schema | Name | Type  | Owner
-----+-----+-----+-----
 public | t1   | table | t-ishii
(1 row)

test=# set search_path to 'myschema','public';
SET
test=# \dt
      List of relations
 Schema | Name | Type  | Owner
-----+-----+-----+-----
myschema | t1   | table | t-ishii
(1 row)
```



# スキーマの使い分け

---

```
SELECT * FROM myschema.t1;
```

```
SELECT * FROM myschema2.t1;
```

```
SELECT * FROM customers;
```

```
SELECT * FROM public.customers;
```



# 特別なスキーマ

---

- public
  - すべてのユーザから見える
- pg\_catalog
  - システムカタログを格納したスキーマ
  - search\_pathに関わらず、必ず検索される



# スキーマと権限

---

- GRANT { { CREATE | USAGE } [,...] | ALL [ PRIVILEGES ] } ON SCHEMA schemaname [, ...] TO { username | GROUP groupname | PUBLIC } [, ...]
- CREATE
  - スキーマ内でのオブジェクトの作成権限
- USAGE
  - スキーマ内のオブジェクトの参照権限



# 行を返す関数

---

```
test=# CREATE TABLE foo (fooid int, foosubid int, fooname
      text, primary key(fooid,foosubid));
```

```
test=# CREATE FUNCTION getfoo(int) RETURNS setof foo AS
      'SELECT * FROM foo WHERE fooid = $1;' LANGUAGE SQL;
```

```
CREATE
```

```
test=# SELECT * FROM getfoo(1) AS t1;
```

```
   fooid | foosubid | fooname
```

```
-----+-----+-----
```

```
     1 |         1 | Joe
```

```
     1 |         2 | Ed
```

```
(2 rows)
```

# 参考文献・URLなど



- PostgreSQL オフィシャルマニュアル
  - ISBN 4-8443-1589-7
- 「本家」サイト
  - <http://www.postgresql.jp>
- 日本 PostgreSQL ユーザー会
  - <http://www.postgresql.jp>
  - pgsql-jp ML
- 商用サポート、技術情報提供
  - <http://www.sra.co.jp>



# おしまい

---

